氏名	松原　みなみ
ヨミガナ	マツバラ　ミナミ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第356号
学位授与年月日	令和3年9月30日
学位論文等題目	〈論文〉　シャルル・グノー作曲　歌劇《ファウスト》における迫真性のあるマルガレーテの演唱表現
	〈演奏〉　C.グノー：歌劇《ファウスト》より　Scene de la prison ～ Finale 他

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	菅　英三子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	佐々木　典子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	平松　英子
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		檜山　哲彦

（論文内容の要旨）

古今東西、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ　Johann Wolfgang von Goethe（1749年-1832年）の戯曲『ファウスト』に創作意欲を駆り立てられて生まれた芸術作品は数多に存在するが、歌劇作品に的を絞れば世に知られた作品はそう多くはないであろう。これはこの戯曲のもつ内容の難解さが原因となって、歌劇のなかにゲーテの求める精神を注入し、同時に娯楽作品として成り立たせることが極めて困難であることを物語っている。実際、19世紀初めに活躍した歌劇作曲家たちの中には、戯曲の魅力を認めつつ歌劇制作には手を出せない者、歌劇化に取り組むが志半ばで諦めた者が言葉を残している。

そうした中、歌劇の分野ではヒット作を未だ生み出しておらず、ドイツ語を解さないシャルル・フランソワ・グノー Charles François Gounod（1818年-1893年）がこの大作に挑み、今日では世界中の名だたる歌劇場の上演レパートリーに組み込まれるまでに成功を収めたことは並大抵のことではない。グノーの歌劇《ファウスト》には、なにか観客の心をとらえて離さない大きな魅力があり、様々な批判を跳ね除けて不動の人気を誇っているのではないだろうか。

筆者は第二回博士リサイタルで本作に取り組み、ハイライト形式で演奏発表した。その時に最も強く感じたのは、グノーのマルガレーテの「強さ」であった。これまで、原作やドイツ歌曲を通して触れてきたマルガレーテとはまた違った「強さ」である。漠然としていて何故そう感じるのか、何が「強い」のか分からない。しかし、これこそグノーの描くマルガレーテの姿であり、その正体を掴むことが出来れば、確信を持って演奏表現が出来るのではないか。本研究はこの様な疑問と推測を起点とするものである。

本論文は、グノーの歌劇《ファウスト》における迫真性のあるマルガレーテを表出させることを目指し、まず、グノーの描くマルガレーテの特質を探求し、それを踏まえて実践的にどういった表現方法をとることが望ましいのか、留意点はあるのかを考察した。

第一章では、田中岩男の先行研究を主な参考資料として、原作である戯曲『ファウスト悲劇第一部』に登場するマルガレーテの人物像と「グレートヒェン悲劇」の捉え方を確認した。ここでマルガレーテは、特殊なファウストと対極に生きる、一般的な人物として登場する。「グレートヒェン悲劇」とはこのような対極な存在様式に生きる2人が出会ったことによって生ずる避けられない存在の崩壊であるということが、戯曲中の台詞やト書き、マルガレーテの劇中歌から明らかになった。

第二章では、19世紀初めのフランスで『ファウスト』がどの様に受け入れられたのかを調べた。ゲーテの『ファウスト』は理解されず、人々の関心は「グレートヒェン悲劇」に集中していたことが分かった。また、フランス革命を経て発展していったメロドラマの演目として翻案上の《ファウスト》が登場すると、物語の筋や登場人物の設定は大幅に変更され、マルガレーテに求められる役割も変化するようになった。ここでマルガレーテはか弱く、悲哀な人物像として描かれ、観衆に愛でられるようになる。次にこのような前提のもと、グノーはどの様に『ファウスト』を知り、歌劇《ファウスト》を創作したのか作曲経緯を調べた。グノーの関心は、一貫してマルガレーテにあったことが母に宛てた手紙から明らかとなり、自己投影していたことが分かった。さらにリリック座に足しげく通う小市民階級の音楽愛好家の支持を受けたことにより、グノーの《ファウスト》は着実にその人気を高めていくのであった。

第三章では作品分析を行った。楽曲分析、また歌劇の台本、ゲーテの原作、下敷きとなったミシェル・カレ Michel Carré（1822年–1872年）のメロドラマ『ファウストとマルガレーテ』の３つの作品の場面や台詞の比較研究を行うことによって、グノーの描く「グレートヒェン悲劇」、そしてマルガレーテの本質について深く迫った。これによって、本作の主軸となるものが何か、目指すべきマルガレーテ像の輪郭が浮き彫りになった。以上を踏まえ、迫真性のあるマルガレーテを実際に表現する方法を考察した。筆者は、グノーのマルガレーテを表現するには、思考や心情の変化について細かく明確に把握しておくことが極めて重要であると結論付けた。彼女の内面から絞り出される音楽にこそ驚くべきエネルギーが込められており、グノーの描くマルガレーテの本質である「強さ」が存在するのである。

また本研究で様々なマルガレーテの姿を辿ってきたことによって、すべてのマルガレーテの人物像に共通する‘一般的な人物像であること’の重要性を再確認できたことは有意義であった。ありふれた存在であった彼女だからこそ、観客は親しみを感じ、〈牢獄〉での凛々しい姿に心を揺さぶられるのではないだろうか。

（総合審査結果の要旨）

学位取得演奏は、グノー作曲のオペラ「ファウスト」からマルガレーテの主要な場面を抜粋して行われた。感染対策として出演者全員がパーテーションで区切られた中で演技・歌唱を行ったが、その難点を見事な発想で活かし、見ごたえのあるオペラ舞台を構成していた。この演出は本学出身の角直之氏によるものであるが、角氏は松原の学位論文を熟読し、松原の目指すマルガレーテについて松原と十分に話し合い、この舞台を作り上げられた。簡潔な中にも深い説得力があり、パーテーションが各場面を象徴していたこの舞台は、オペラ公演の一つの指標にもなり得ると思われる。シューベルトの歌曲を中心とした第一回の博士リサイタル、グノーのオペラ「ファウスト」を取り上げた第二回の博士リサイタル、また論文執筆のために研究してきた多くの楽曲への取り組み、それらの成果が十分に発揮された演奏となっていた。歌唱技術も向上し、表現も一層豊かになり、全体を通して非常に安定した演奏であったと同時に、松原が描き出そうとするマルガレーテをしっかりと演じていた。

学位論文は、「グノー作曲歌劇≪ファウスト≫における迫真性のあるマルガレーテの演唱表現」と題し、「ファウスト」に登場するマルガレーテの演唱表現について論じている。第一章では、「グレートヒェン悲劇」についてゲーテの戯曲の考察を行い、さらにグレートヒェンの詩がどのように歌曲として作曲されてきているかということについて、楽曲分析を行いつつ論じている。第二章では、このゲーテの「ファウスト」がフランスでどのように受け止められ、グノーのオペラが誕生したかを、19世紀のフランスという背景を考察しつつ、論じている。そして第三章では、マルガレーテの演奏表現について考察し、松原の研究成果を述べている。十分に「言葉」を通して伝わるように表現し得ているかというと、まだ未熟な部分も散見されるが、丹念に考察し、自身の言葉で述べ、また論文と演奏が相互に良い結果をもたらしていることが高く評価される。シューベルトの歌曲「糸を紡ぐグレート

ヒェン」から始まった松原の「グレートヒェン悲劇」の研究成果と、その舞台表現としての演奏に結びつく論文であった。

以上の点を踏まえ、合格と判断した。